

1.

ジェンダー研究所 2022(令和 4)年度 事業概要

ジェンダー研究所概要

2022 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

学際的・先駆的なジェンダー研究と教育を推進する国際的な学術拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、学際的かつ先駆的なジェンダー研究と若手研究者育成を推進する国際的な学術拠点である。その起源は、1975 年にお茶の水女子大学に創設された「女性文化資料館」という研究機関である。ジェンダーやフェミニズムという言葉が一般的には全く知られていなかった時代から、歴代の所属研究者たちはジェンダー研究に取り組み、学内外・国内外の研究者らと積極的に研究交流を続けてきた。これら先人の研究者たちが培ってきたジェンダー研究の成果と国際的な学術ネットワークを礎に、現在、ジェンダー研究所では、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、若手研究者の育成、学術雑誌『ジェンダー研究』の編集・刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

[参照:本報告書 110 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	女性文化資料館設立
1986	女性文化研究センター設立
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立

▶ジェンダー研究所 2022 年度事業概要

1. 研究プロジェクト

2022 年度は、IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 5 件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが 7 件、そして海外の助成金によるプロジェクト 2 件の、計 14 件のプロジェクトが進行している。IGS 所属研究者らは、研究会やセミナー、国際シンポジウムを企画開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。

1)IGS 研究プロジェクト

	プロジェクト名	担当
1	「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
2	東アジアの越境的女性運動	大橋
3	資本と身体ジェンダー分析	大橋・足立・板井
4	性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
5	グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山

2)外部資金による研究プロジェクト

	財源	テーマなど	担当
1	科研費基盤 C	ジェンダークォータの政治学:制度化と抵抗 2019(H31)～2022(R4)	申
2	科研費基盤 B	女性の政治参画の障壁:国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査 [研究代表者:三浦まり(上智大学)]2018(H30)～2022(R4)	申
3	科研費基盤 C	香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析 2019(H31)～2023(R5)	大橋
4	科研費基盤 B	再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯[研究代表者:定松文(恵泉女学園大学)] 2019(H31)～2022(R4)	大橋 平野
5	科研費基盤 B	新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー [研究代表者:堀芳枝(早稲田大学)] 2020(R2)～2022(R4)	大橋 足立
6	科研費 国際共同研究加速 基金(国際共同研究 強化 B)	人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー [研究代表者:堀口正(大阪公立大学)] 2021(R3)～2024(R6)	大橋
7	科研費若手(B)	「からゆきさん」にみる移動・性・権力の諸相 2017(H29)～2022(R4)	嶽本

3)海外の助成金によるプロジェクト

①ノルウェーリサーチカウンシル INTPART(戸谷・小玉・仙波・佐野)2019(H31)～2022(R4)

②ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK(戸谷)2021 年 8 月～2025 年 7 月

[参照:本報告書 15～23 頁「研究プロジェクト」、67～71 頁「学術成果の発信」]

2. 国際シンポジウム等の開催

IGS 主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。3 年ぶりに対面でのイベント開催がなかった 2022 年度は、国際シンポジウム「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」をオンラインと対面のハイブリッドで開催した。「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」の概念を切り口として、基本的人権である妊娠・中絶・再生産の自己決定権を損なうのは何か、法・政治・社会運動はどのように関わってきたのか、米国と日本の専門家らが対面で議論した。その内容は、『ジェンダー研究』第 26 号（2023 年 7 月刊行予定）に特集企画として掲載する。また、ジェンダー研究所所属教員が指導する大学院生たちが主体となって企画した IGS セミナー（学内限定）「フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか」を開催した。フェミニズム誌の編集者を招き、フェミニズム誌を編集することの意義と、アカデミアの内から外へジェンダー研究の成果を広く一般に還元することについて、院生・学部生らも参加して熱心な議論が交わされた。このほか、IGS セミナー 8 件、研究会 1 件を主催したほか、共催国際シンポジウムを 2 件開催した。[参照:本報告書 25～49 頁「国際シンポジウム・セミナー」]

IGS 主催国際シンポジウム

リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く[本報告書 27 頁]



IGS セミナー

フェミニズム出版と運動：共感と啓蒙をどう繋げるのか[本報告書 31 頁] (ポスター画像は次頁)

IGS 主催セミナー・研究会

 The Marcos Return: What Does it Mean for the Philippines? [本報告書 30 頁]	 フェミニズム出版と運動: 共感と啓蒙をどう繋げるのか [本報告書 31 頁]	 19 世紀米国女性のインターセクショナルなアイデンティティとメディア理論: ソジャーナ・トゥルース女性会議「わたしは女ではないのか?」(1851) を例に [本報告書 33 頁]
 日本(と世界)における性的マイノリティの政治 [本報告書 35 頁]	 クィアな出路か、新たなクィア／ホモノーマティビティか: 中国大陸と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性 (モビリティ) [本報告書 37 頁]	 「棄民」を記録する: 今村昌平・ドキュメンタリー映画『からゆきさん』(1973) 再考 [本報告書 39 頁]
 家電と暮らしのポリティクス [本報告書 41 頁]	 クィアする現代日本文学—ケア・動物・語りとジェンダー [本報告書 43 頁]	 IGS 研究協力員研究報告会 [本報告書 45 頁]

共催・後援 シンポジウム

 東アジアにおけるジェンダーと政治代表 [本報告書 47 頁]	 「ガラスの崖」をよじ登る: 「ガラスの天井」の先にあるもうひとつの見えない障壁 [本報告書 48 頁]	 日本フェミニスト経済学会 2022 年度大会 [本報告書 49 頁]
---	--	---

3. 国際研究ネットワーク

2022 年 10 月から 2023 年 1 月にかけて、香港浸會大学ルセッタ・カム准教授が IGS 研究協力員として来日し、主に中国文化圏（台湾、香港、中国、および海外在住中国系女性）における宝塚歌劇団のファンコミュニティについての研究に従事した。また 12 月 9 日には大橋史恵 IGS 教員とともに IGS セミナー「クィアな出路か 新たなクィア／ホモノーマティヴィティか：中国大陆と香港のクィア女性たちのトランスナショナルな移動可能性」を企画し、中国文化圏に出自をもつクィア女性たちの国際移動をめぐって氏が 2015 年から継続的に取り組んできた研究プロジェクトの成果報告を行った。

2023 年 1 月 13 日には、申琪榮 IGS 教員が 2015 年から取り組んできた IGS の国際共同研究プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究を総括する国際シンポジウム「東アジアにおけるジェンダーと政治代表 Gender and Political Representation in East Asia」が WONDER Research Network on Women and Diversity in East Asian Representation 主催、ジェンダー研究所共催によって実施された。

このほか 2021 年度から大阪市立大学堀口正教授による国際共同研究プロジェクト「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」に大橋史恵 IGS 教員が参加し、中国社会科学院や華東師範大学の研究協力者とともに共同研究に取り組んでいる。

[参照:本報告書 25～49 頁「国際シンポジウム・セミナー」、51～59 頁「国際研究ネットワーク」]



IGS 研究協力員として来日した香港浸會大学ルセッタ・カム准教授が企画・登壇した IGS セミナー「A Queer Exit or a New Queer/Homonormativity?: Transnational Mobility of Queer Chinese Women from China and Hong Kong」(本報告書 37 頁)

4. 若手研究者の育成:AIT ワークショップ、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の指導

2022 年度は 4 月から原則対面での授業となった。IGS 所属の特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」は IGS の国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」の一環であるが、これはタイにあるアジア工科大学院大学（Asia Institute of Technology）との短期交換研修プログラムである。AIT から博士前期課程の院生が来日し、お茶大院生と研究交流を行い、お茶大からも博士前期課程の院生たちがタイに派遣され、フィールドワークや、研究交流、帰国してからの AIT ワークショップ・プログラムの報告会、報告書作成などが組み込まれている。

また所属教員指導のもと、5 人の院生が博士前期課程ジェンダー社会科学専攻を修了した。

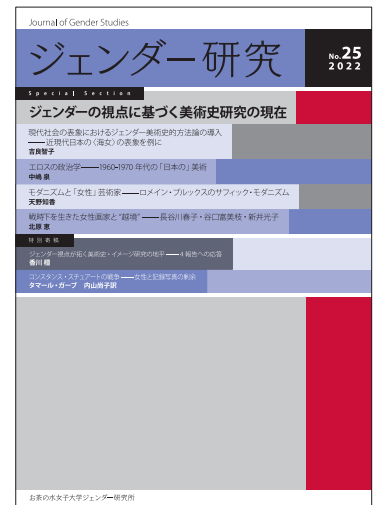
[参照:本報告書 61～66 頁「若手研究者の育成」]



AIT ワークショップ・プログラムでタイのアジア工科大学院大学(AIT)にて研究発表をするお茶大院生と AIT 院生たち

5. 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信

国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第 25 号（2022 年 7 月刊行）は「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」を特集した。本特集は、日本でジェンダーの視点から美術史研究を牽引している 4 名の研究者による充実した研究論文 4 本に加え、特別寄稿としてこの特集の元となった同名の IGS シンポジウムのコメンテーターであった香川檀氏のコメント原稿と、この分野で美術史学研究をリードするロンドン大学のタマール・ガープ教授の論考の 2 本で構成されており、ジェンダー視点に基づいた美術史研究の現在地が示されている。投稿論文は厳正な審査の結果、5 本の掲載が認められた。書評は、前年度までのジェンダー・フェミニズムの関連分野で注目された 17 冊の著書を、ジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものとなっている。



報告書シリーズ（IGS Project Series）は、『「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1（IGS Project Series 20）台湾におけるジェンダークオータ』の増刷をした。[参照:本報告書 67～71 頁「学術成果の発信」]

6. 文献収集・史料電子化、ウェブ発信、社会還元

文献収集・資料整理分野では、寄贈図書・資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。

ウェブサイトによる情報発信は、例年と同じくイベント案内や開催報告の発信に取り組むほか、ウェブサイト掲載情報を精査し、研究所事業全般についての情報公開が日本語および英語でわかりやすくなされるよう、情報整理作業を進めている。



またウェブサイトの運営と並行して、研究所の活動をより周知するために、ホームページへの QR コードを載せた葉を新たに製作した。葉は二種類あって、それぞれが研究所内で募集したキャッチフレーズをもとにデザインされている。

社会貢献の面では、一般公開のセミナー・シンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、報道機関の取材に応じるなど、ジェンダー課題に関する知見の頒布にも努めている。[参照:本報告書 73～77 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、79～82 頁「社会貢献」]

7. 構成メンバー

前年度末に研究所事業の中核を担った計 3 名のメンバーが一度に退職したことにより、スタッフ体制に大きな変動があった。本年度から新たに特任講師 1 名（5 月から）、特任リサーチフェロー 1 名（8 月から）、特任アソシエイト・フェロー 1 名（5 月から）が着任した。また前年度末に退職した 3 名のうち、平野恵子横浜国立大学准教授と仙波由加里氏の 2 名が研究協力員として研究所事業に参加したほか、10 月から 1 月の間、ルセッタ・カム香港浸會大学文學院准教授も同協力員として迎え入れられた。その他の研究員・客員研究員等については、前年度から変化はなかった。

[参照:本報告書 110 頁資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」、84～94 頁資料①「構成メンバー」]